

京伝読本典拠小考

三宅宏幸・宮田 樹・渡邊珠莉

はじめに

明治初期の長谷川元寛著『かくやいかの記』（明治九年（一八七六）識語）が、近世後期の読本や合巻に描かれる物語構想や趣向の典拠を考証することを踏まえ、徳田武「馬琴と『旅路の打聞』^{注1}」が「読本が和漢の書物から説話と知識を取り込むことによって成立する文学である以上、出典考は基礎的にして必須の作業である」と述べるように、読本に基づいた資料を探索・検証することは、その作者の知識源を明らかにし、作者の工夫を探ることに繋がる。そして典拠を確定することができれば、読本作者の周辺にどのような書籍が流通したかという書籍流通の問題にも通じよう。もちろん、資料を利用するという書行為に関しては、作者が意図して用いたのか、ただ身近にあっ

たため使用したのか、確言できない部分もある。しかし、作者の独自性と考えるのか、あるいは直接依拠した先行作品があるのかを踏まえた上で分析する方が、作品の生成過程に対する誤解は少なくなるであろう。

本稿では、先学の指摘を参考にしつつ、山東京伝の読本三種『桜姫全伝曙草紙』、『善知安方忠義伝』、『本朝酔菩提全伝』に描かれる場面について、従来の研究で指摘された典拠よりも京伝読本に近い特徴を有する資料を紹介する。

なお、本稿は渡邊珠莉（愛知県立大学二〇一九年度卒業）、宮田樹（^{みやたいつき}愛知県立大学二〇二一年度卒業）が執筆したそれぞれの卒業論文の一部（卒業後に加筆・修正した箇所もある）に、三宅宏幸が一例を加えて文体を揃えたものである。執筆者の掲載順は教員の三宅を最初に掲載して五十音順で並べたが、研究内容の分担率とは無関係であることを断っておく。

一、「桜姫全伝曙草紙」と「新斎夜語」

まず京伝作・歌川豊国画「桜姫全伝曙草紙」（以下「曙草紙」と略称）を取り上げる。^{注2}「曙草紙」は文化二年（一八〇五）刊、丹波の鷲尾義治の娘桜姫と伴宗雄との恋を中心に据えつつ、復讐譚や怨霊の出現などを描き、歌舞伎で有名な清玄桜姫物の説話に中国小説を取り合わせた物語である。^{注3}

本章では巻四第十六、桜姫が清玄の涙で蘇生する場面を検証する。以下にその場面に至るまでの梗概を示す。^{注4}

桜姫が十六歳の春、都清水寺に参詣した桜姫は若僧清玄に見染められる。桜姫に恋慕する信田勝岡らによって鷲尾義治は討たれ、一家が離散する事件のなかで、桜姫は伏屋に横死し、その死骸は遺言通り、ありし日の姿のまま鳥辺野に送られる。一方、桜姫を見染めた清玄は清水寺を退去し、鳥辺野の墓守に零落している。桜姫の死を見て清玄は一たびは愛欲を断つが、桜姫が蘇生するに及んで再び愛欲を起して挑む。

傍線部を引いた箇所、清玄が桜姫の遺体と再会し、桜姫が蘇生する場面について、「曙草紙」と勸化本『勸善桜姫伝』（大江文政著、明和二年（一七六五）刊）との関係を指摘した中村幸

彦「桜姫伝と曙草紙」^{注5}が、「本巻の庄巻であるこの庵室の一場」と評し、『勸善桜姫伝』巻四「桜姫雪中詣」出雲社「井清源再慕」桜姫「被害」との関連を述べる。清水正男「桜姫全伝曙草紙」をめぐって^{注6}は、清玄が桜姫を介抱して目を覚ます流れを、歌舞伎の「遇曾我中村」（寛政五年（一七九三）、江戸・村座初演）から得たものと論じた。桜姫の蘇生については、佐藤深雪「二人の桜姫——桜姫全伝曙草紙小論」^{注7}が近松門左衛門作「一心二河白道」（元禄十一年（一六九八）初演カ）に先例があることを指摘し、二川清「桜姫全伝曙草紙」及び『勸善桜姫伝』と先行戯曲との影響関係について^{注8}が、「文化二年正月刊行の『通俗西湖佳話』（中国白話小説『西湖佳話』の翻訳）中の「断桥の情跡」に、夭折した秀英という乙女が暴かれた棺の中から蘇生する筋があり、『曙草紙』と刊行の時期が近いだけに、『曙草子』は文化二年九月刊）京伝にヒントを与えたのではないかという推測も可能であろう」と言及する。

これらの指摘された作品は、山本和明「曙草紙」を読み解く^{注9}でも、「作品の読解の指針ともなる典拠」、「あるいは参考ともなる趣向の類似作品」として紹介されており、『曙草紙』読解において重要な指摘であるといえよう。なお、山本論文は文化十三年の『世事見聞録』にも鳥部野茶毘所で女性が蘇

生ずる記事が見えることを指摘し、「実事件との関わりも興味深い」と言及している。

しかし疑問も残る。中村論文がいみじくも「京伝は大英断をもつて、いったん桜姫を死なしてしまふ」と述べたように、『勸善桜姫伝』巻四の清源と桜姫が再会する場面では、桜姫は死んでいない。『曙草紙』では、墓守となった清玄の元に桜姫の遺体が届けられるという展開である。近松の「一心二河白道」の蘇生場面も詳しい場面描写はなく、清水論文が述べた『遇曾我中村』の清玄が桜姫を介抱する場面は、恋仲の千葉之助清春と夫婦になれないことを歎き、清水の舞台から飛び降りる箇所と思われるが、そこには、

桜姫 いつかな放れぬ我が念力。南無大慈大悲の観世音。

我が願ひ叶へてたび給へ。帰命頂礼。

ト大太鼓の風の音にて、傘を担いで、桜姫、舞台より飛び降り、ウンと悶絶する。清玄、うろたへ、いろく介抱し、瀧の水を手に掬つて来て、口移しに吞ませようとしてまた気を替へる事、いろく思ひ入れあつて、

ト口から口へ水を吞ませ

清玄 桜姫どのいなうくく。

ト桜姫、気の付いたるこなしにて

とあり、桜姫が舞台から飛び降りて気絶したところを介抱するという違いがある。『通俗西湖佳話』も、文世高が劉秀英の部屋に忍ぼうとして木から落ちて飯死し、悲しんだ秀英が自害する、そして二人が葬られそうになったところ、世高が蘇生し、秀英の口に息を吹き込むことで、秀英は意識を取り戻すという流れである。「棺桶からの蘇生」という点では『曙草紙』と共通するが、『曙草紙』のように墓守をしていた男と再会するという趣向ではない。

以上見てきたように、従来の研究で指摘された典拠を改めて確認すると、物語の展開や蘇生方法、そして文辞に関しても『曙草紙』との差異が見出せる。

これらの疑問が『新斎夜語』巻二第三話「小西氏の処女天遇の嫁をなす」を踏まえることで氷解する。『新斎夜語』は梅隴館主人著・画工不明、安永四年（一七七四）刊の読本である。作者の梅隴館主人については、徳田武『新斎夜語』と談義本^{注12}が、『寛政重修諸家譜』の記述から幕臣の三橋成烈（一七二六—一七九二）であることを明らかにしている。

では、『新斎夜語』「小西氏の処女天遇の嫁をなす」の梗概を以下に示す。

——慶長末年、大阪天満に小西某という薬種商がいた。その一人娘の阿紋と恋仲になった奉公人の富吉は、店を追い出されてしまふ。埋田の茶毘場で働くこと三年、そこで阿紋の遺体と巡り会う。嘆き悲しむ富吉の涙が阿紋の口に入るや、阿紋は蘇生、富吉は阿紋を抱えて曾根崎へ逃れる。二人は小西家に再び迎え入れられ、夫婦となる。

梗概を読むだけでも女性が蘇生するという共通点が認められるが、まず本話に登場する富吉の設定について見てみよう。富吉は阿紋と恋仲となったことが雇い主である阿紋の両親に露見し、暇を出される。故郷に帰り、埋田の「茶毘場」で働くことになった富吉の役割は以下の通りである。

凡新没の人ある時は、寺に送りて引導の語を授け、扱三昧に昇来りて隠坊に伝へ、やがて茶毘する事なれども、日いまだ没せざれば、しばらく昏鐘を待つ事なり。されば、葬家の人は隠坊に渡して、下火を待たて帰るもあれば、その間は、狼犬の遺体を損じ、盗賊の遺財を伺ふを恐れて隠坊より戌人を付る事なり。

富吉は運び込まれた棺の中の遺体を守る役目を任されており、その役目によって阿紋の遺体と再会することとなる。

この設定が『曙草紙』巻四「桜姫蘇生清玄柱死」における清

玄と共通する。当該箇所本文には、「此墓守の僧は別人にあらず、是乃清水の清玄がなれる果也。清玄清水を退去して、所々方々を迷ひありきけるが、漸本心に立かへり、此野の墓守となりて、荒たる庵に住、日毎に送り来る亡者の下火の時いたれば、経をよみ十念を授け、回向する事常なり。」と書かれている。興味深いのは、この本文より少し遡る場面において、家臣である公光が落命した桜姫の遺体を運ぶのだが、

公光みづから棺をか、げ、世をはぐる身なれば日のくる、をまちて、あたり近き寺に送行、引導の語を授け、それより鳥部野の茶毘所にかき行て、藤六をかへらしめ、狼犬の遺体を損じ、盗賊の遺財を窺を恐れ、公光みづから棺をまもり、権下火の時をまちけるに、

とある点であろう。『曙草紙』では清玄ではなく公光が桜姫の棺を守っており、その点は「新斎夜語」と異なるが、「引導の語を授け」や「狼犬の遺体を損じ、盗賊の遺財を窺を恐れ」など、「新斎夜語」の語彙と一致する箇所が見られるのである。

さらに、『曙草紙』と「新斎夜語」における、女性の遺体と再会して蘇生するまでの場面を比較してみよう。先に『曙草紙』の本文を示す。墓守の清玄はいつもの通り棺を預かり、読経したところ棺の中から声がする。

清玄益あやしみ、①立よりて棺の蓋をひらき、おほへるきぬをか、げ、月の光によく見れば、②こはいかに日來慕つる姫に疑ひなし。③病に月日をかさぬるにや、肉脱疲瘦の体ながら、顔色変せず唇なほ紅にして、玉貌ねふるがごとくなれば、見たがふべくもあらず。夢うつ、ともわきまへず、且驚且悲、④動情しのびかねて、棺より出し骸を抱きていひけるは、「我凡夫のあさましきは、此姫のはやくかく成果んとは思はず、愛情の念深く、年来の修行をむなしくせしこそ悲しけれ。思ふに九相の詩に、男女の淫楽は互に臭骸を抱といひしもうべなり。人は皮をのみ愛して、唯いつはりの姿なる事をしらず、いづれの人かこれにあらざらん。茶毘所もおほきに我住此野に送れ、眼前新死相を見せて、我執著の悪念を断しむる事、よく深く因縁なり。いよく凡情をすて、正覚に帰すべし。されどかゝる花の姿をむなしく灰となさんこと、惜べく悲むべし。」と⑤ひとり嘆ひとり説、⑥雨のごとく落ちる涙、姫の顔にはらくとかがりて口にいりけるが、⑦忽一息を出しければ、いそぎまどひて庵室のうちに投入、⑧身うちを按摩⑨薬を口に入れて水をそぎ、身をちがつけて肌をあたゝめなどするに、しばしありて⑩甦生こ

とを得たり。清玄①一向夢のこ、ちし、「姫、②こ、ちはいかに」とへば、桜ひめ目をひらき、③あたりの尋常ならざるを見て惘然とまよひ、

清玄が棺を開けると遺体は恋慕していた桜姫であり、悲しんだ清玄の涙が桜姫の口に入ると桜姫は息を吹き返す。そして蘇生した桜姫は事情が分からず、「惘然」とする。この「涙が口に入つて蘇生する」点が、これまでに言及された典拠にはなかつた要素といえる。

『新斎夜語』第三話、富吉は棺を預かる際、亡くなった女性「甚だ形をおし」むことを聞く。恋仲であった阿紋が「死すとも形をかへざることを願」つたことを思い出した富吉は胸騒ぎがする。その場面は次の通りである。

しきりに忪して、且かなしく且なつかしく、④動情のひかねて①立寄、棺の蓋を開き、覆へる衣をかがげ見れば、「②こはいかに疑もなき紋女なり。③病に月日を重ぬるにや。肉脱疲瘦の体ながら、顔色変せず唇猶紅なり。さるにても年月憂苦のうちにも、花鳥の色音にそへてわすれがたく、いつしかよそながら、筆の跡だにもと思ひしに、不図き棺を穿てその冷体を見んとは。我はやく死して、半坐を明て待つべきものを」と⑤独嘆じ独説、

④ 心中恍惚たるまま棺よりいただき出し、背を撫胸を打、「さるにても今一度声をだにきかせ給へ」と、転狂乱す。

⑤ 雨のごとく落る涙の新没の面にそそぎ口に入りしかば、

⑥ 忽ち一息を出しければ、⑧ いよいよ按摩し懷中にありし

⑨ 薬口に入れて、水を流ぎ、身を近付けて朋を温めなど

せしに、半時計にて⑩ 甦る事を得たり。⑪ 一向夢の心地

して、「君は紋女にあらずや。⑫ 御こちいかにか」と問へ

ば、紋女も富吉を見、且⑬ あたりの尋常ならざるを見て、

茫然とまよひ、

傍線に付した丸数字は、共通する要素に対応させている。順序の入れ替わりもあるが、両書の場面描写は十三点程似通っている。特に傍線部③、女性の遺体の「病に月日をかさぬるにや、肉脱疲瘦の体ながら、顔色変せず唇なほ紅にして」という様子は語彙も一致し、⑥の「涙」で息を吹き返す点、⑬の蘇生した女性が「あたりの尋常ならざるを見」て「ぼうぜん」と迷う点なども同様である。桜姫が「妾が此黒髪は暁に夜に養て、宝とすること玉の如し。なからんのちも飴をおろさず、彩衣をさして粧を失ふ事なかれ」と遺言するように、阿紋も「死すとも形をかへざることを願った点も共通している。^{注14}

すなわち、前掲二川論文が既存の清玄桜姫物の演劇と比較し

た上で、「不気味な雰囲気醸成という点においては『曙草紙』が優れ、この辺に京伝の創意を見ることができよう」と評した桜姫蘇生譚は、『勸善桜姫伝』を基とする清玄と桜姫との再会場面に、『新斎夜語』の富吉と阿紋の再会場面を組み込んで描かれたと解する方が自然であろう。

二、『善知安方忠義伝』と『西播怪談実記』

次に京伝作・歌川豊国画『善知安方忠義伝』（以下『忠義伝』と略称する）を取り上げる。^{注15}『忠義伝』は文化三年刊、後編は予告がありながらも未刊。平将門の遺児である良門が蝦蟇仙人から妖術を学び、姉の如月尼も滝夜叉姫となつて、父将門の仇を討ち、天下を覆そうとする陰謀物である。^{注16}

本章では、かつて将門の臣であつた善知安方が、狩りに出て雉子を得る場面に着目する。

安方はある日、郡司より「番の雉子」を求められたため、弓矢を携えて山に入る。翌朝に庄屋が家にやって来たところ、安方が狩りからまだ帰ってきていないにもかかわらず、妻の錦木が雉子を無事に得たと答える。安方が帰ってくると、たしかに二羽の雉子を狩っており、庄屋に渡す。話を聞いて不思議に

思つた安方が錦木に問うと、錦木は安方が狩りに出た時に息子の千代童がおびえる事があり、今夜も二度おびえたので、狩りが成功したとわかつたと語る。

本多朱里「善知安方忠義伝」攷—京伝読本の方法^{注17}」は、徳田武「解題^{注18}」や佐藤深雪「解題^{注19}」によつて「大方明らかにされ」た典拠に加え、「補足を試み」る形で当該場面について次のように述べる。

卷之一・第二条に、善知安方の妻錦木が、一子千代童が夜寝ている間におびえる回数で安方の取つてくる鳥の数を知るといふ趣向がある。この話は、『道成寺靈蹤記』（寛延三年、礼淵）など多くの仏教説話に載せられ、物語などにもよく取り入れられている。たとえば井原西鶴の『西鶴諸国はなし』（貞享二年）卷四—四「驚は三十七度」では、常陸国鹿島に住む獵師である目玉の林内の子が、寝ている時に「現に声をあげて、ひく／＼身のうごく事、三十七度」あり、それが林内の取つてきた鳥の数に符合したため林内は驚き、万の道具を塚にして供養したという話になつてゐる。

そこで、『西鶴諸国はなし』（貞享二年（一六八五）刊）卷四「驚くは三十七度」の本文を確認してみよう。^{注20}

ここに常陸の国、鹿島の片里に、目玉の林内といふ者、世をわたる業もおほきに、冬の夜のあらしをもいとはず、あたりの若者をかたらひ、明暮鳥の命をとる事、かぎりもなし。つれそふ女房は、やさしくも、「この事とまれ」と、異見する事たびたびなれどもやめず。これをかなしく、ひとりねられぬままに、世の無常を觀ずる時、寝させ置きたる二人の子供、現に声をあげて、びくびく身のうごく事三十七度なり。次第おそろしくなつて、男を待ち兼ねるに夜更けて門をたたき、「やれ今宵は、仕合せ」といふ。女泪を流し、「幾程うき世にあるべきぞ。むくいの程をしりたまへ。今夜の鳥の数、三十七羽あるべし。中鳥八羽、大鳥三羽」と申す。籠をあけて見るに、締鳥数違はねば、林内横手をうつ。宵より子どもがおどろくありさまを語れば、身ぶるひして、これより万の道具を塚につき色々供養なし、今に鳥塚とて残れり。

たしかに、鳥を狩ると家にいる子どもに異変が起る点は共通する。だが、『忠義伝』に描かれるような庄屋とのやりとりなどは、『西鶴諸国はなし』に看取できない。典拠と考えて良いのか疑問が残る。

鳥を狩ることによる発心譚については、本多論文も注で触れ

た堤邦彦「勸化本概説」^{注21}の研究が参考となる。堤論文は元禄四年（一六九二）刊『六道物語』下巻、宝永八年（一七一一）刊『善悪因果集』巻二の三をあげ、

こうした題材（鳥を殺すと子に異変が起こる話―筆者補）は貞享二年（一六八五）刊『西鶴諸国はなし』巻四の四「驚は三十七度」にも見受けられる。江本裕氏は本章の類話として『古今犬著聞集』（天和四・一六八四序）巻一「鶏指発心之事」および貝原益軒の『教訓世諦鑑』（享保六刊）巻三を挙げている。（中略）じつはこの種の話は、若狭小浜の町人学者木崎愴窓の『拾権雑話』（宝暦七・一七五七序）巻二十三の二十八や、諸国遍歴の体験をまとめた本草家佐藤成祐の『中陵漫録』（文政九年・一八二六序）巻十一「墮落禽画」に、それぞれ若狭本郷村、備中松山の採集例をかぞえ、宝暦四年刊『西播怪談実記』巻二「綱十村獵夫発心の事」にも播磨の類型伝承が看取される。

と述べ、江本裕「西鶴諸国はなし―伝承とのかかわりについて―」^{注22}を踏まえつつ、類話を補足した。さらに、堤邦彦「長篇勸化本の意義―『道成寺霊蹤記』の場合―」^{注23}では、右にあげた類話の他に享保十一年（一七二六）刊『諸仏感応見好書』下巻も加えている。

そこで各資料を比較、検討した結果、『西播怪談実記』巻二「綱十村獵夫発心の事」の記述が、『西鶴諸国はなし』や他資料よりも『忠義伝』に近いと判明した。『西播怪談実記』は、宝暦四年（一七五四）刊の読本、書肆は大坂の吉文字屋市兵衛である。作者は播州佐用村の春名重右衛門忠成であり、日頃見聞した西播磨地方の奇怪な話を転録する。^{注24}この『西播怪談実記』と『忠義伝』との関連について言及した先行研究は、管見の限り見当たらないようである。

京伝の利用実態を示すために、長文を厭わず『忠義伝』の本文を以下に示す。

外が浜に侘しくくらし、^①夏はすなどりし冬は鳥獸ととりて世渡とし、しばらく年月をおくりぬ。しかるに^②妻錦木男子を産、名を千代童といひて、今年七才になりけるが、^③一日当所の郡司より急に「一番の雉子を打て出せよ」と命ぜられ、^④庄屋何某来りてその事を伝へけるゆゑ、郡司の命なれば等閑にしがたく、^⑤弓矢を携て暮方より山にゆきぬ。^⑥翌朝未明に庄屋又来り、錦木にむかひ「善知はいまだ山よりかへらずや。郡司の御用の鳥なれば、若取得ざるときは、某も共に迷惑する事なり」といひて、安心せざる様子なり。^⑦錦木こたへて、「鳥はたし

かに番取得候。氣づかひし玉はず待候へ」といふうちに、
果して⑧安方、雌雄の雉子を捉て帰来れば、⑨庄屋喜ひ、
「今程錦木殿より一番取たりとは聞しが、目に見ざるうち
はおぼつかなく思ひしに、そのことばにたがはで重畳な
り。佃はおつて郡司よりたまはるべし。片時もはやくさし
あげん」とて、鳥を携ていそがはしく立かへりぬ。⑩そ
の跡にて安方妻にむかひ、「そなた我鳥を得たる得ざるを
先だつて知るべきはづなし。しかるをたしかに番得たる
なんと、胡乱なることをいひしは心得ず」といへば、⑪錦
木涙をはらくとおとし、「たしかにすることのはべりて
しかは申せし」といふ。安方いぶかり、「それはいかなる
ゆゑぞ」とかさねてとひけるにぞ、⑫錦木やうく顔をあ
げ、「されば其事に侍り。おん身も殺生はすまじき業とし
りつ、し玉ふは、外になりはひとすべき業なきゆゑなり。
まづ今日までは殺生のかげにて、親子三人露命をつなく。
それにうちあけて語らば、おん身の心よわりてなりはひも
いでまじと、それがいたはしさに今までは心一つにお
さめてつゝみかくせしが、今は打あけ語り侍るなり。⑬お
ん身獵に出給ふ留守の夜は、いつも千代童を我そばに寝
さするに、一度寤夜半もあり、二度おびゆる夜半もあ

り、三度四度驚る時もあり。⑭始のほどは心もつかざり
しが、よく思ひ合すれば、一度おびゆれば鳥一羽をと
り、二度おびゆれば二羽をとりてかへり玉ひ、ためし見る
に一度もその数のたがひたる事なし。そのゆゑにおん身
かへり玉はぬさきに、妾ははや、獵の多少をよく知ぬ。思
ふに今日⑮かく根をおして問玉ひしは、宿善時の到来なる
べし。⑯身にもかゆべく思ふいとし子の此世から地獄の相
をあらはすは、あさましく悲きことにはべらすや。千代童
を不便と思ひ玉はゞ、殺生はこれを限りにやめ玉へ。生
あるものは必食ありとか聞ば、⑰餓死するほどの事もあ
るまじ。よし又路頭に倒るとも、⑱業因の引ところならば
是非もなし」と、涙をおとしつゝ、かきくどきければ、⑲安
方はじめてこれを聞、物の報の靦面たる道理を曉し、
『西鶴諸国はなし』と異なる点として、安方が「夏はすなど
り」をする点、郡司に番いの鳥を所望される点、庄屋に狩りの
心配をされる点などがあげられよう。

『西播怪談実記』巻二「網干村獵夫発心の事」の本文は次の
通りである。

揖東郡網干村に獵師在。①夏は漁をし、冬になれば雁鴨
を取て、世わたりのいとなみにしけり。②妻と男子壹人

娘吉人、家内四人を身一つのいとなみにて過しけり。天和年中の十一月下旬の事なりしに、近所③さる大名より御用の鴨老番仰られ、④役人來りて其村に逗留して待居たり。⑤獵師は用意して暮方より出て行けり。⑥翌未明に彼役人きたりて、「いかに内儀、亭主はまだ帰すや、今日の御用の鳥間違ては氣の毒なり」といふ。⑦妻答て、「鳥は番、慥に取たり。御氣をせられず待給へ」といふ中に、⑧亭主、番の鳥を提て立帰れば、⑨役人見るより、「いかに亭主、内儀より先達て番取たるとは聞しかど、目に見ざれば寛束なくおもひしに、大切の御用、間違なく躬も大慶致す。佃は追て当村庄屋より相渡べし」とて、鳥を請取て立帰る。⑩跡にて其妻に問けるは、「其方、鳥のとれたると、とれぬとを先達て知べきやうなし。それに「慥に番取し」など、胡論なる事をいふ事、心得ず」といへば、⑪女房涙を流し、「それはいかに」といへば、⑫女房顔をもたふあやしみ、「それはいかに」といへば、⑬「されはそこにも悪敷こと、知て志給ふは、別に渡世すべきやうなき故也。先けふ迄は殺生のかげにて親子四人の命をつなぐ。それに打あけて申さんは、その心よはり、どもならむといはしければ、たゞ今迄はつ、しみて

申さず。寔は⑬獵に行給ふ留守の夜は兄弟の子共を左右にねせ侍るに、兄がおひゑ、妹がおひゆる夜半もあり。⑭初のほどは不審成しが、能々思ひ合すれば、兄がおひゑたる夜は雄鳥を取て帰られ、妹がおひゑぬれば女鳥違ふ事なく、夜部は兄弟共におひゑしぞかし。しかるに彼侍大切の御用とて氣をせかるれば、安堵させましたく、慥に番ひ取たと申たるを、⑮かく根を押して問給ふも、宿善時の到来なるべし。⑯身に替てもと思ふ子共の、かく此世から地獄の相をあらはず事、不便やかなしやとおもへば、一盃の水も咽をこさず。そなたにも子共不便と思ひ給はば、殺生は夜部を限におもひ切給へ。生たるものには餌食あるときけば、⑰餓死する程の事も有まじ。よし又道路に倒るゝとも、⑱業因のひくひく所ならば、是非もなし」と涙と共にかきくどけば、⑲夫もさるものにて一々聞届、側なる剃刀をもて、鬢を切放し

本章においても、各場面の共通点として対応する箇所に丸数字と傍線を付した。右に示したように、都合十九点で両書の場面展開や表現などが共通する。中でも、傍線部①「夏はすなどりし冬は鳥獸をとりて世渡とし」や⑦「鳥はたしかに番取得候。氣づかひし玉はず待候へ」、⑨「目に見ざるうちはおぼつ

かなく思ひしに」、⑩「たしかに番得たるなんど、胡乱なることをいひしは心得ず」、⑭「始のほどは心もつかざりしが、よく／＼思ひ合すれば」、⑮「かく根をおして問玉ひしは、宿善時の到来なるべし」、⑰「餓死するほどの事もあるまじ」などは語彙まで一致しており、『西播怪談実記』巻二のほぼ丸取りと理解することができる。

一方、『忠義伝』と『西播怪談実記』との間に差異も散見する。例えば、『忠義伝』では一子千代童がおびえる回数によって妻が捕らえた鳥の数を当てるが、『西播怪談実記』では、夫婦の間に男女二人の子が存在し、兄がおびえれば雄鳥、妹がおびえれば雌鳥というように、兄妹によって雌雄の判断を行っている。その他にも、依頼される鳥が番の雉子（『忠義伝』であるか鴨（『西播怪談実記』）であるか、仏道を悟るか出家するかなどの細かな差異はある。しかしこれらの違いは、『忠義伝』が取り込んだ謡曲「善知鳥」などの設定や構想に沿うように変更した点と考えられよう。

以上見たように、『忠義伝』と『西播怪談実記』とは場面描写の多くの特徴が共通し、かつ文言の一致まで見られる。京伝は『西播怪談実記』を利用することで安方の発心譚を描き、主君将門の遺児良門を探す旅に出る契機としたのである。

三、『本朝醉菩提全伝』と『小説比翼文』

次に、京伝作・歌川豊国画『本朝醉菩提全伝』（以下『本朝醉菩提』と略称）を取り上げたい。『本朝醉菩提』は文化六年刊、文化三年刊の京伝作『昔話稲妻表紙』の後編として、不破名古屋の次代小山三や野曝悟助に一休和尚を絡ませた物語である。^{注5)}

『本朝醉菩提』巻五「父母安楽行品第八」、堺の扇屋塵右衛門の娘小田井は「眉目容貌美麗」、「十五の初花」となったある日、土器を売りに来た任助を見て恋い焦がれるようになる。

此日より恋の重担をおひそめて、胸を焦しけれど、彼が住家もしらず、誰媒にたのみていひよるべきよすがもなく、唯心一つに悩みけり。かねて①此家に斑毛の飼犬あり。小田井によく馴てゆくさき／＼の跡をしたひ、万のこゝと意にしたがひければ、小田井も深く憐けり。一日小田井②椽さきに出て空をながめ、任助が事を思ひつゞけて居たる折しも、彼③庭にありて尾を揺を、小田井見やりて、「汝は我心をたま。我は頃目物おもひありてしよしも忘る、事あたはず。④汝若心あらば、我切なる志を恋人

に通はせくれかし」と、人にもいふ如くいひけるに、犬ちかくす、みて、尾を搖聲をなして⑤其詞を聞入たるさまなれば、小田井又いはく、「かねて父上の物語に聞つる

に、⑥もろこしの書に「述異記」、陸機とかいふ人の飼ける黄耳といふ犬、書簡を古郷にとゞけたる例もありけるよし、其犬ほどにはあらずとも、汝我書を恋人にとゞけれべきや」といひけるに、犬又声をなして応が如し。これによりて小田井、硯箱を取出し、⑦心のたけを書に記し、これを⑧竹筒に入れて犬の頸に結つけ、「疾返書をとりに来よ」といふに、⑨犬は身ぶるひして頓に走去ければ、
「こゝでは聞とゞけつるよ」とうれしみつ、其帰るを待居たり。

小田井は一目惚れした任助に恋文を届けようと思うものの、その手段がなく悩んでいたが、飼い犬がその気持ちを感じ取ってくれたように見えたことから、恋文を竹の筒に入れて犬の首に結び、犬を送り出した。

本場面の典拠については、先行論でもほぼ言及されたことはないようであるが、徳田武「稲妻表紙後編本朝醉菩提全伝」の項が以下のように述べる。

小田井は、陸機の飼犬黄耳が書簡を郷里に届ける話を持ち

出し、その話には『述異記』との注がある。しかし、安永四年和刻『述異記』にはこの話は収められず、『太平広記』四三七「陸機」に、

晋ノ陸機、少キ時、頗ル獵ヲ好ム。呉ニ在リ。家客有リテ快犬ヲ獻ズ。黄耳ト曰フ。機、洛ニ在リ、常ニ將キレバ自カラ随フ。此ノ犬黠慧、能ク人語ヲ解ス。又タ常ニ人二三百里ノ奴ヲ借ル。犬、路ヲ識リ自ラ随フ。機、官ニ京師ニ羈ガレ、久シク家問無シ。機、戯レニ犬ニ語りテ曰ク、我が家絶エテ書信無シ、汝能ク書ヲ賣シテ馳セテ消息ヲ取ルヤ否ヤト。犬喜ビ、尾ヲ揺リ声ヲ作シテ之ニ応ズ。機試ミニ書ヲ為リ、盛ルニ竹筒ヲ以テシ、犬ノ頸ニ繫グ。犬駟路ニ出デ、走りテ呉ニ向カフ。飢エレバ則チ草ニ入り肉ヲ噬ム。大水ヲ経ル毎ニ、輒チ渡者ニ依リ、毛ヲ弭レ尾ヲ掉ヒテ之ニ向カヒ、因リテ載渡ヲ得タリ。機ガ家ニ到リ、口ニ筒ヲ啣ヘ声ヲ作シテ之ヲ示ス。機ガ家、筒ヲ開キ、書ヲ取りテ看畢ル。犬又タ人ニ向ヒテ声ヲ作シ、求ムル所有ルガ如シ。其ノ家、答書ヲ作りテ筒ニ内レ、復タ犬ノ頸ニ繫グ。犬復タ馳セテ洛ニ還ル。計ルニ人行ハ五旬ナルモ、犬ノ往還ハ纒カニ半バナリ。後、犬死ス。

還シテ機ガ家ニ葬ル。村南二百歩ニ土ヲ聚メテ墳ヲ為ル。村人、之ヲ呼ビテ黄耳塚ト為ス。〔割注〕述異記ニ出ヅ」

とある。京伝は、『太平広記』の引書『述異記』の名を出したのである。

徳田論文は和刻本『述異記』に陸機の話が収められていないことから、中国の『太平広記』からの利用を指摘する。たしかに、『本朝醉菩提』巻五巻末に記載される「通計四十七部為編本朝醉菩提伝於于翠竹深処之醒醒斎中抄読之」の中に『太平広記』や『述異記』の書名が掲載されており、その可能性は高い。ただし、同じく「四十七部」の中に書名が記されている『和漢三才図会』巻三十七「狗」にも、陸機の話は記載がある。京伝がいずれの書に直接依拠したかは判然としないが、陸機の話が京伝の念頭にあったことは間違いない。

しかし右に見たように、『本朝醉菩提』と故事とで大きく異なる点の問題となる。すなわち、黄耳は陸機の手紙を家族に届けたが、『本朝醉菩提』における「斑毛の飼犬」は恋文を運んだ点である。小田井は任助との〈恋〉の「媒妁」を犬に頼ったのである。家族に書簡を届けるという陸機の話の元にしたつ、宛先を恋人へと変更した京伝の工夫と考えると良いのか。

女が男への恋文を犬に託す趣向は、実は曲亭馬琴作・葛飾北斎画の中国本型読本『小説比翼文』（享和四年（一八〇四）刊、以下「比翼文」と略称）に前例がある。『比翼文』第二編「犬児恩を感じて情子に使用する事并宝剣を典として右内禄を讓事」平井右内の娘おつまは十五歳になり、幼少期に父の元で学んでいた親族の本所助市と「遊びの雑事」で「仮初に妻定」していたこともあり、「互にゆく末はこの人ならずして、誰にか百年の身をまかすべき」と思うようになる。^{注27}

こ、に右内が①家にとしごろ養ける犬あり。この犬黒き毛のうち、白き毛三ツと四ツと絞染のごとくまじりたれば、その名を三四白とよべり。ある日おつまは②椽の柱にうちもたれて、ひとり助市が事を思ひなやみ居たりしが、かの③三四白はしり来て、尾を挿つ、求食けり。おつま犬にむかひていへりけるは、④むかし呉の陸機は、その身京洛にありながら、故郷にたよりせまほしき折からは、養犬に書をよせて、万里の安否をしるとかや。⑤なんぢもしこ、ろあらばわか思ふ人に使せんやと戯れければ、此犬⑥そのことを聞きたるがごとく、走りよりにて二声三声吼たりける。さてはわが為に媒するにやと嬉くて、まづ⑦こ、ろみに艶簡さら〜とかいした、め、これを⑧竹の筒にい

れて犬の首にかくれば、^⑨犬はそのまゝ、走り去ぬ。嬉さいはんかたもなく、又こゝろづけばこはげだちて、所も去ずそのおとづれをまち居たるに、少刻ありて犬は走り帰るぬ。筒をひらきてうちを見れば、助市が回筒ありて、此程のおこたり思ふかきりを書つけたり。しばしはこゝろを慰る物から、恋しさは弥漫着、是より日ごとに犬に書

をよせてかたみに情を運せける。

飼い犬に恋文を託す点、犬の首に提げた「竹筒」に恋文を入れる点、犬に手紙を託す故事として陸機の故事を引用する点で『本朝醉菩提』と『比翼文』は共通する。加えて傍線部②の女性が「椽さき」や「椽の柱」にもたれて男のことを想う点、④の「汝若心あらば（なんぢもしこゝろあらば）」などは、『太平広記』には見られない要素である。また犬が恋文を渡すという場面は両書ともに挿絵として描かれており（図1・図2）、男女の違いなど構図は一致しないものの、斑毛の犬が恋文を届ける様子は共通しているよう。

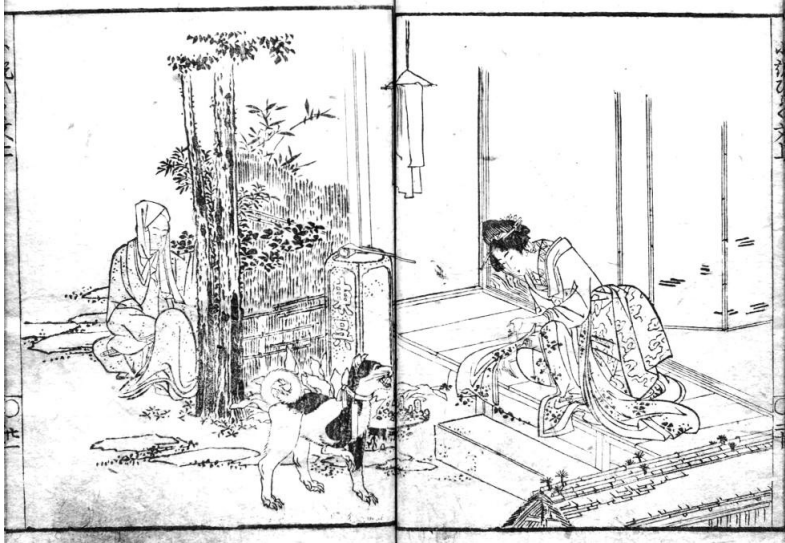
『本朝醉菩提』と『比翼文』とで異なる点も見られる。『本朝醉菩提』では任助が小田井の恋心を受け入れない一方、『比翼文』の助市は犬の三四白を介した文通を続け、そのために右内は娘のおつまが三四白に魅入られたと誤解し、犬を射殺してし

まう。また『本朝醉菩提』では、小田井と任助が実は兄妹であり、犬がその恋を仲立ちをしようとしたのは小田井の祖父洞九郎に殺された犬の怨念が犬張子に憑依したためであったが、『比翼文』にはそういった理由付けは描かれていない。

『本朝醉菩提』における任助と小田井の恋物語の構想自体は、つとに山口剛「解説」が指摘するように中国小説の『通俗醉菩提』に拠り、小田井に取り憑いた犬の怨霊を除く話を組み合わせる契機となつたのは仮名草子「一休咄」巻二に拠るものだろう。京伝はここからさらに、〈恋〉と〈犬〉の繋がりから『比翼文』の要素を採り入れ、そこに記される陸機の故事については出典となる資料を参照したのではないだろうか。とすれば、構想に連想される趣向を織り込む京伝読本の手法と共に、この時期に考証に泥んでいた京伝が、考証随筆において出典を一々明記して考証を行う姿勢も、本場面には表れているように思われる。^{注9}

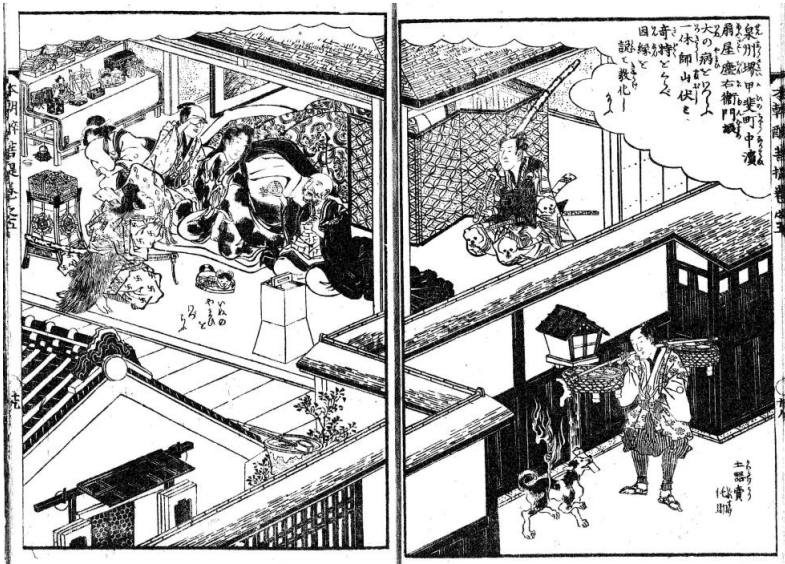
おわりに―まとめと今後の課題―

本稿では京伝読本の『曙草紙』、『忠義伝』、『本朝醉菩提』における一場面について、依拠したと思しき先行作品の指摘を



【図1】『比翼文』上巻 (20ウ・21オ)

(国会図書館デジタルコレクション、DOI: 10.11501/8942893)



【図2】『本朝酔菩提』巻五 (28ウ・29オ)

(国文学研究資料館所蔵、DOI: 10.20730/200006396)

行った。「曙草紙」における清玄と桜姫の再会場面には「新斎夜語」が、「忠義伝」における狩った鳥の数を当てる趣向は「西播怪談実記」が、「本朝酔菩提」の犬に恋文を託す趣向は「小説比翼文」が、それぞれ参照されたと思われる。

篁田将樹「『新斎夜語』解説」^{注30}が指摘しているが、文化三年刊の芍葉亭長根作「『坂東奇聞』濡衣双紙」自序に「新斎夜語」が触れられる。都賀庭鐘「英草紙」や「繁野話」の二書と比較して、

新斎・前席・垣根草の初編、文花降るといへども、事に託て自己の識見を述、議論高にいたりては、剪灯の書中、子胥范蠡を罵の流亜にして、二書之美を奪に足れり。

とある。「新斎夜語」は「怪異前席夜話」「垣根草」とともに評価され、また林子平や大田南畝、屋代弘賢等も「新斎夜語」を読んでいた形跡があるとされる。このことを踏まえると、文化初期に長根や京伝の周辺に「新斎夜語」が流通していた可能性が高い。とすれば、江戸読本の「新斎夜語」利用の事例を積み上げていくことも可能ではないか。

『西播怪談実記』は、北城伸子「解説」^{注31}が述べるように、大坂吉文字屋市兵衛の出版であるが、刊年未詳の四冊本や続編『世説麒麟談』を加えた八冊本、また四冊本の改題本『西遊雑

記』、四巻五冊本の改題『絵本見聞』西国奇談』など五種の版が存在しており、書名を変えて板行され続け、「時代を超えて」広く需要された。この『西播怪談実記』と江戸在住の京伝との関係については、読本や合巻など他作品とのさらなる比較・検証を要する。このことは先の「新斎夜語」との関係も含め、京伝による前期読本に位置する怪談・奇談の利用実態解明に繋がる。

『比翼文』との関係については、馬琴と京伝との関係性に波及しよう。二人の読本執筆に関しては、書肆による「競作状況」^{注32}、また「談合」^{注33}など様々な見解が述べられている。一方、本稿で指摘した「本朝酔菩提」と『比翼文』との繋がりが、京伝が馬琴の中本型読本を直接参照したと思しき様相が見取れるが、紙幅の都合で叶わなかった京伝と馬琴の描き方の違いについては、今後の課題である。

以上、従来指摘されてきた京伝読本の典拠を再検証することで、より京伝作品と近い資料に言及した。これらの例を見る限りではあるが、京伝読本の場面描写や表現は先行する作品の展開や字句をほぼ引き写す点が見受けられる。無論、その方法が悪いと述べたいわけではない。その特徴を踏まえた上で京伝読本の典拠の探索、分析、評価を行っていく必要がある。

*京伝読本の本文は山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』15～17(読本1～3)(ぺりかん社、一九九四―二〇〇三)に拠った。

注

- (1) 『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店、一九八七・五)。「かくやいかかの記」については、佐藤悟「かくやいかかの記」の周辺」(『国語と国文学』61―6、一九八四・六)、佐藤悟「かくやいかかの記」考証(一)」(『実践国文学』44、一九九三・一〇)が、作者や内容について検証を行っている。
- (2) 宮田樹「初期読本研究―『新斎夜語』の成立と展開―」(愛知県立大学日本文化学部国語国文学科、二〇二一年度卒業論文) 第三章。
- (3) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』「桜姫全伝曙草紙」の項を参照。
- (4) 佐藤深雪「二人の桜姫―『桜姫全伝曙草紙』小論―」(『静岡女子大学国文研究』15、一九八二・三)から一部を引用。

- (5) 『中村幸彦著述集』6(中央公論社、一九八二・九)。初出は『国語国文』7―8(一九三七・八)。
- (6) 水野稔編『近世文学論叢』(明治書院、一九九二・三)。
- (7) 注(4)佐藤論文と同。
- (8) 『江戸文学』14(一九九五・五)。
- (9) 『近世後期江戸小説論攷』(勉誠出版、二〇二三・二)。
- (10) 『遇曾我中村』は日本戯曲全集14『曾我狂言合併集』(春陽堂、一九二九・七)に拠った。
- (11) 三宅宏幸「中国小説(白話系)からの影響」(西日本近世小説研究会編『享和・文化初期読本の基礎的研究』西日本近世小説研究会、二〇二〇・二)が、『絵本報仇安達原』が『通俗西湖佳話』と共通する趣向を用いていることを指摘しており、それと比べても『曙草紙』と『通俗西湖佳話』の趣向とは類似しない。
- (12) 徳田武『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店、一九八七・五)。
- (13) 飯倉洋一校訂代表『前期読本怪談集』(国書刊行会、二〇一七・七)「『新斎夜語』解説」(笈田将樹執筆)に拠った。なお、『新斎夜語』本文も本書の翻刻に拠る。引用する際は、会話文の改行を詰める処置を施した。

- (14) 佐藤至子「京伝と九相詩」〔『文学』17-4、二〇一六・七〕が『曙草紙』を貫く九相詩のモチーフを本場面から読み取っていることから、『新斎夜語』にもその片鱗を見出すことができるかもしれない。
- (15) 渡邊珠莉「山東京伝研究―怪異の趣向―」（愛知県立大学日本文化学部国語国文学科、二〇一九年度卒業論文）第二章。
- (16) 『デジタル大辞泉』「善知安方忠義伝」の項の説明が簡潔であったため、参照した。
- (17) 『読本研究新集』2（翰林書房、二〇〇〇・六）。
- (18) 『山東京伝全集』16（読本2）（ペリかん社、一九九七・四）。
- (19) 『山東京伝集』（国書刊行会、一九八七・八）。
- (20) 宗政五十緒・松田修・暉峻康隆校注訳『井原西鶴集』2（小学館、一九九六・五）に拠った。
- (21) 堤邦彦『近世仏教説話の研究―唱導と文芸―』（翰林書房、一九九六・七）。
- (22) 『伝承文学研究』17（一九七五・二）。江本論文は、鳥の趣向の類話として、『奇異雑談集』「三条東洞院鳥屋末期に頭より雀のくちばし生出る事」（四ノ七）、『善悪報はなし』「殺生人口ばし有子を産事并父背中に文字すはる事」（二ノ三）、『因果物語』（片仮名本、中ノ三十二）、『古今犬著聞集』（巻二）などを指摘している。
- (23) 堤邦彦『江戸の怪異譚―地下水脈の系譜―』（ペリかん社、二〇〇四・一一）。
- (24) 金井寅之助「西播怪談実記と岡田光憫」（『西播怪談実記』松蔭女子学院大学国文学研究室、一九七〇・一〇）を参照。なお、『西播怪談実記』の本文は堤邦彦・杉本好伸編『近世民間異聞怪談集成』（国書刊行会、二〇〇三・三）所収の北城伸子校訂『西播怪談実記』に拠った。
- (25) 『日本古典文学大辞典』5（岩波書店、一九八四・一〇）「本朝醉菩提全伝」の項（水野稔執筆）を参照。
- (26) 徳田武『馬琴京伝』中編読本解題（勉誠出版、二〇一二・三）。初出は『山東京伝全集』17（読本3）「解題」（ペリかん社、二〇〇三・四）。
- (27) 『比翼文』の本文は、高木元校訂『中本型読本集』（国書刊行会、一九八八・二）に拠る。
- (28) 日本名著全集『読本集』（日本名著全集刊行会、一九二七・五）。
- (29) 例えば考証随筆『骨董集』（文化十年序）には、出典

の書名を明記して本文を引用しつつ、考証する様子が見られる。京伝の考証については、井上啓治『骨董集』論序説』（『京伝考証学と読本の研究』新典社、一九九七・二）に詳しい。

(30) 注(13)に同じ。

(31) 注(24)『近世民間異聞怪談集成』所収。

(32) 高木元「江戸読本の形成」(『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷—』ぺりかん社、一九九五・一〇)。

(33) 大高洋司「『四天王剽盜異録』と『善知安方忠義伝』」(『京伝と馬琴—(稗史もの)読本様式の形成—』翰林書房、二〇一〇・五)。

〔附記〕

本稿の一部は、JSPS科研費・基盤研究(C)「最盛期読本の総合的研究」(20K00344)の助成を受けた成果の一部です。